

「巻頭特集」

上野天神祭のダンジリ行事

百数十体の鬼行列と 絢爛豪華なだんじり曳行

伊賀の秋を彩る風物詩「上野天神祭のダンジリ行事」。上野天神宮(菅原神社)の秋祭りの神輿渡御に供奉する形で加わった鬼行列、だんじりなどで構成される巡行を言います。2016年には、ユネスコ無形文化遺産に「山・鉾・屋台行事」33件の1つとして登録されました。



上野天神祭を支え、伝承に努める「上野文化美術保存会」の皆さん。左から副会長の松生龍治さん、会長の八尾光祐さん、副会長の伏見正道さん、事務局の木村佳三郎さん。同保存会は昭和22年の発足で、鬼町4町と榎車町9町の祭町13町で組織されています。近年の課題は担い手不足。日程の変更も、地元を離れている人が帰省して祭りに参加できるよう工夫したものです

各町が競い合うように贅を尽くして作った、絢爛豪華なだんじり。それそれに見応えがあり、9基が勢揃いする様は壮観です。藤堂高虎が築いた地割を今に残す町並みは道幅も狭く、電線や家々の軒先をかすめるようにして、だんじりは曳かれていきます



文化文政年間には 現在の形がほぼ完成

上野天神祭の起源に関しては、万治3(1660)年、再興を藤堂藩に願い出たことが藩関係の史料に記されているものの、それ以前については記録がありません。

再興後は、上野城内での神輿の渡御が許され、貞享5(1688)年には3代藩主・藤堂高久が初めて城内で祭礼を見物します。以後、歴代藩主が高覧したことから、これを栄誉として、城下の町々は競い合うように祭りを盛り上げていきました。神幸の供奉行列の出し物も、年々趣向が凝らされていきました。やがて鉾や囃子屋台などが登場し、文化・文政(1804~1830)の頃には、現在のようなだんじり行事の形態が整ったと言われています。

大正時代の祭りの写真には、紋付羽織袴に山高帽の人々が写っています。彼らは各町のいわゆる旦那衆で、その姿でだんじりの前を行進するのが慣例でした。昭和初期まで続けられ、だんじりの曳き手は近隣在郷の農民たちが担いました。また、伊賀では昔から祭りの際、各家庭で甘酒をつくって接待する習慣がありました。「呼び遣い」と呼ばれる風習で、祭りに来てくれるように、甘酒を重箱に詰めて親類縁者に配ったそうです。

祭りの期間は3日間。以前は10月23日~25日でしたが、昨年から10月25日までの直近の日曜日とその前2日間に変更されました。今年は10月19日~21日の開催です。

悪疫退散と五穀豊穡を 祈って練り歩く鬼行列

鬼行列は三鬼会(上野相生町、上野紺屋町、上野三之西町)による「役行者列」と、上野徳居町の「鎮西八郎為朝列」で構成されており、この4町を「鬼町」と総称します。元禄(1688~1704)の頃、

初代藩主・藤堂高虎から下賜されていた能面を役行者の面として用い、供奉の一趣向で行われていた仮装行列に参列したのが、鬼行列の始まりとされています。役行者列は役行者が大峯山に峰入りする様子を、鎮西八郎為朝列は為朝が鬼を従え凱旋する様子を、それぞれ模した行列です。先頭には高さ5メートルに及ぶ大御幣。続いて、先払いの役をはたす悪鬼(真蛇)をはじめ、100人を超える大人や子どもが、さまざま面



鬼行列のもう一人の主役、鎮西八郎為朝(源為朝)は源頼朝、義経兄弟の叔父にあたります。鎮西八郎為朝列は、役行者列よりも100年ほど遅く、寛政年間(1789~1801)に始まったと伝えられています



4体のひよろつき鬼の1体「釣鐘」。ひよろつき鬼は行列のなかでは特に動きが大きく、午前と午後で演者が交替することもあるようです。この顔(面)でグンと迫られればやはり怖いですが、子どもたちは本気で泣き出しています



鬼行列で使われるのは能面だけでなく、行道面などが転用されています。行道面とは、脱経しながら列を作っての周囲を回り供養礼拝する際に付ける仮面。写真は役行者の前を行く四町のうち、広目天と増長天(後ろ)です

を付けるなどして練り歩きます。能面は視界が極端に狭く、前方中央部しか見ることができません。正面を向いて歩くのもひと苦労ですから、一本歯の高下駄の役行者(阿古父慰)には介添えが付きまます。

鬼行列で見逃せないのが「ひよろつき鬼」です。2体の「斧山伏」と「釣鐘」「笈持」からなる4体で、沿道を右へ左へとふらつきながら、観客に襲いかかるよう迫ります。そこかしこで子どもの悲鳴や泣き声が聞こえてくるのも、おなじみの光景。ひよろつき鬼に泣かされた子どもは「かんのむし」が落ちて元気に育つと言われ、小さな子どもを鬼に差し出す親も少なくありません。

まるで酔っ払っているかのような動作のひよろつき鬼ですが、実は、個々の鬼には受け継がれてきた歩き方や所作があるそうです。演者は経験者から指導を受け、練習を積んで祭りに臨んでいます。微妙な動きの違いを探してみるのも楽しそう。

豪商たちの経済力で 製造されただんじり

だんじりは、町人文化が花開いた文化・文政期に、ほぼ現状のようになったと言われています。町衆が財力を付けるに伴い、当初は作り物を載せた山(山車)だったものが、絢爛豪華な装飾を施しただんじりへと発展していったのでしょう。

古くから京・大和文化の影響を強く受けてきた伊賀らしく、煌びやかで華麗な屋台車にお囃子を載せるだんじりは、京都祇園祭の山鉾の形態

初代藩主・藤堂高虎から下賜されていた能面を役行者の面として用い、供奉の一趣向で行われていた仮装行列に参列したのが、鬼行列の始まりとされています。

を見本としています。「コンコンチキン」というお囃子も、祇園囃子が元となっています。

だんじりを出す上野東町、上野中町、上野西町、上野向島町、上野新町、上野鍛冶町、上野魚町、上野小玉町、上野福居町の9町を「榎車町」と呼びます。町ごとで意匠が異なっており、先導する印、だんじりそれぞれに名前が付いています。本祭では朝の9時に東御旅所を出発しますが、8時には9基のだんじりが集結します。金糸銀糸を使った美しい幕の刺繍など、間近でじっくりと鑑賞できるのでおすすめです。

だんじりの構造で面白いのは、囃子座のある上層の屋根部分が下がること。かつて上野城内へ入るには大手門を潜らなければならず、屋根を下げて入城していました。現在でも上野福居町のだんじりにその機構が残されています。

巡行順は毎年9月9日の「祭礼事始籤取式」において、籤引きで決まります。今年は上野福居町が1番くじを引き当てました。10月に入ると、各町からお囃子を練習する音色が聞こえてきます。昨年は降雨と台風接近により、2日目以降の行事が中止になってしまいました。今年は3日間とも天候に恵まれることを期待したいですね。

役行者列の主役である役行者。鬼を使役したと伝わる、修験道の開祖です



information

上野天神祭

10月19日[金]

10月20日[土]

10月21日[日]

各町のだんじりが曳き出され、飾り付けられます。夕刻には提灯や雪洞が灯され、お囃子が奏でられます

だんじりの曳き初めと、鬼の「足揃えの儀」が行われます。だんじりは午後と夜に本町筋や二之町筋を曳行されますが、特に夜の巡行は暗闇に提灯の明かりが揺れ、幻想的です

最終日は本祭で、御輿に続き、鬼行列、だんじりが1日かけて城下町を巡ります